I-12

建築家 C・F・A・ヴォイジーの自邸「Cottage」にみるウィールデン・ハウスの影響について

C.F.A. Voysey's home 「Cottage」throuth the influence of Wealden-house

Abstract:The purpose of this paper is to make clear peculiarity of a rectangle plan of C.F.A.Voysey(1857~1941) through contracting「Cottage」(1885) with Wealden-house. Voysey prefer yeoman's Wealden-house to Bipshop Wealden-house for using motif of the middle-class house.

○　川﨑 圭祐 [2]，　大川 三雄 [1]
Keisuke Kawasaki[2]，Mituso Ohkawa[1]

1. はじめに

19 世紀後半の英国で起こった「住宅復興」[*1] において活躍した建築家 C・F・A・ヴォイジー (Charles Francis Annesley Voysey 1859~1941) の住宅は「白いコテジ」[*2] と称され、C・R・マッキントッシュ (Charles Rennie Mackintosh 1868-1928) をはじめとする近代建築の先駆者達に大きな影響を与える。ヴォイジーの住宅はそのような近代的な鋭さをもつ一方、その住宅の構成要素の多くは英国の伝統的な住宅をモチーフとしており、土着的な親和性を感じさせる。そのような住宅は建築界ばかりではなく、建築的な知識の有さない大衆、とくに新興ブルジョワジーに受け入れられ多くの住宅作品を生み出すことに繋がる。

2. 既往研究

これまでヴォイジーは N. ペヴスナー、R. バンハム、K. フランプトンら近代建築批評家によってイングランドの伝統的な住宅をモチーフにしていると指摘されがらも [*3]、ヴォイジーの簡素性・単純性及び装飾排除の思想からその評価はとくに近代建築との親近性が語られてきた。このような評価は伝統性に依拠した設計思想をもつヴォイジーに対し偏った評価がなされているとして、近年、片木篤、小林正子らによって伝統性という観点から評価が行われている。[*4] とくに小林正子は 2003 年の論文「屋根形態にみられる C.F.A. ヴォイジーの伝統性に依拠する設計思想」においてヴォイジーの住宅における屋根形態からヴォイジーがとくにウィールド地方におけるホール・ハウスであるウィールデン・ハウス (図 1) をモチーフにしていた可能性を指摘している。

図 1: ウィールデン・ハウスのひとつであるベイリーフ (1405-30 年頃) の外観写真

3. 研究目的・方法

ヴォイジーは住宅の設計に伴い、様々な平面形態を用いていた。L 字型、バタフライ型、中庭型、塔型などある中でもとくに矩形型平面は最も多く (表 1)、また二度の自邸の設計においても用いられている。本稿では自邸であり後の矩形型平面の原型となる「Cottage(1885)」(図 2) からウェーデルン・ハウスの影響を明らかにすることを目的としている。

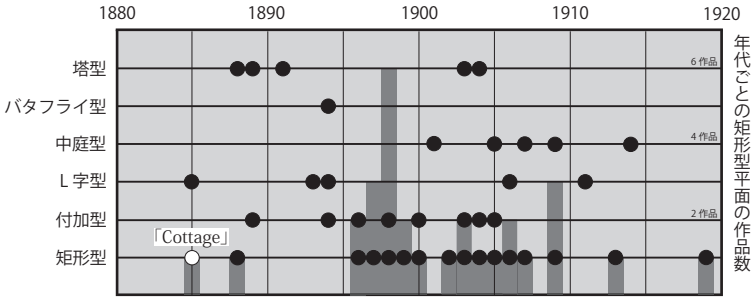
4. ヴォイジーの設計思想

ヴォイジーの設計思想は W. モリス (William Morris 1834~96)、P. ウェッブ (Philip Webb 1831~1915) といった住宅復興の主導者らの影響のもと、伝統性に依拠したものであった [*5]。だが、ヴォイジーは伝統的なモチーフをそのまま用いる伝統主義者を否定し、「伝統への回帰は、しかしながら、建築家の個性という媒体を通じなければ、定式化された規則の遵守に堕するだけである」[*6] と述べ、「真のオリジナリティというものには、常に個々の芸術家によって、伝統的な形態の発展に精神的な何かが与えられるものである。」[*7] と述べている。ヴォイジーは伝統的形態を独自の解釈の元、独自の様式へと昇華させていったのである。

5. ウィールデン・ハウス

ウィールデン・ハウス (図 3.4) とは、ホール・ハウスのうち、ウィールド地方に見られる特徴的な住宅をさす。ウィールデン・ハウスを特徴づけるジェティはその使用上の理由はいくつか言われているものの、その使用の大きな理由は装飾的な意味であった。当時、ウェールド地方のヨーマン (自由農民) は牛の牧畜による土壌開発により中世の終わり頃には貴族階級に入るほどではなかっ

表 1: ヴォイジーの住宅作品における主な平面形態と矩形型平面の数の推移



1: 日大理工・教員・建築 Department of Architecture, CST., Nihon-U.
2: 日大理工・院 (前)・建築 Department of Architecture, CST., Nihon-U.

たが、英国の中でも最も豊かであったことがその使用の背景として考えられる。その定義としては「対になった二階建のウィングに挟まれる一層のオープン・ホールをもち、一階ではウィングの前面と背面の壁がホールの壁と同一面にあるが、二階では壁が張り出し (ジェティしている)、また、ホールの高さと二階ウィングの高さは等しく、ひとつながりの寄棟屋根が架けられる (中略) といった特徴をもつ木造住宅の形式である。」[*8] とされている。ウェールデン・ハウスの平面構成は基本的にホール・ハウスと同じであるが、その平面形態は単純な矩形であり、屋根は単一の寄棟屋根が用いられる。それが図 5 にあげられるような牧師という有力者の住宅においても同様である。ここではヨーマンの住宅とは異なり、奥行二部屋で構成され室も Hall の他に Sitting Room が配され、サービスルームと居室が分断され、より快適な住宅となっている。

6. ウィールデン・ハウスと「Cottage」

ヴォイジーの自邸である Cottage(1885) を参照する。屋根は単一の寄棟を用い 2 階部分にジェッティを模した意匠にウェールデン・ハウスの特徴でもあるハーフティンバーが用いられている。一階部分にはイングランド中部コッツウォルズ地方より採集されたラフキャストの白い壁にバットレスを配し、それによって張り出したジェティを支えている。窓は横長の連続窓を用いている。平面においても単純な矩形を用い、奥行き 2 部屋で一階は居室とサービス・ルーム、エントランス・ホールの 3 部構成、二階は片廊下でつながれた私室群となっている。

このような平面構成は中世においては有力者であった牧師のウィールデン・ハウスとよく似ている。これを見るにヴォイジーはウェールデン・ハウスでもとくに牧師などといった有力者の住宅をモチーフとしたと考えられる。ヴォイジーは牧師のウェールデン・ハウスをモチーフに、Hall の代わりに当時の労働者階級の住宅に用いられてた多機能を有する Living Room を住宅の中心大きくとることにより家族中心の住空間を提示していた。

7. まとめ

自邸「Cottage」の外観意匠、平面構成共にウェールデン・ハウスからの影響が見受けられた。ヴォイジーは見習い時代にウェールド地方の建築の研究者であり建築家であった G, ディヴィー (George Devey 1820~1896) のもとでウェールデン・ハウスを学び、独立後、そのウィールデン・ハウスを主なモチーフに用い自邸「Cottage」の設計を通して自らの設計思想を広めるために用いていた。そこでは「多くの貧しい人の住宅は、より快適である。」[*9] という設計思想のもと労働者階級の居室に用いられてた Living Room を中央に配した住まいをに提示していた。

【注釈】＊1：ドメスティック・リヴァイバル .17~18 世紀の英国において展開された産業革命によって多く誕生し、主に頭脳労働に従事していた中流階級は「職住分離」という新しいライフスタイルの確立や鉄道の発達、猥雑不潔となった都市を離れて、田園に住処を求めた。そのため中流階級の郊外住宅の需要が一気に高まった。中流階級の住宅では貴族の住宅のような必要以上に細分化された住宅を簡略化し構成し直し、日常生活を重視した機能的な住宅が建てられるようになった。またこの時代はピクチュアレスクや「人の手で汚れていない」自然志向が強まった結果、素朴で田舎風の小屋を模放しようという建築様式が生まれており、それが好んで用いられていた。この動きは主に 1860 年以降顕著となり「住宅復興」と呼ばれている。＊2：ヴォイジーの幾何学的なフォルムに無装飾の凹凸もない白い壁を強調した特徴をもつ小住宅はこのように称されていた。：片木篤「アーツ・アンド・クラフツの建築」/SD 選書 /2005 年 2 月 /p.91　＊3：N. ペヴスナーはヴォイジーの住宅が「英国のマナ・ハウスやコテージに近いもの」であったという。(Pevsner,N:Pioneers of Modern Design Movement,158,1936/ ペヴスナー ,N, 白石博三訳：モダン・デザインの展開、みすず書房 ,103,1957)R. バンハムはヴォイジーに対する評価を「ヴォイジー自身の意図は、南イングランド地方独特のコテージを改良、継続することにすぎなかった」と述べている。(Banham,R:Theory and Design in the First Machine Age,The Architectural Press,48,1960/ バンハム ,R, 石原達二郎訳：第一機械時代の理論とデザイン , 鹿島出版会 ,71,1976)K. フランプトンは「ヴォイジーの手法が英国ヨーマンの建物の基本的な長所を回復させようという率直な試みであった」と述べている。(Frampton,K:Modern Architecture a critical history,Thames and Hudson,48,1980/ フランプトン ,K, 中村敏男訳：現代建築の道程 A & U,) ＊4：片木篤「アーツ・アンド・クラフツの建築」/SD 選書 /2005 年 2 月 /p.91 ＊：ヴォイジーは関節的にモリス、ウェッブに影響を受けたものの、伝統主義者としての彼らの考えを否定していた。　＊6：Voysey,C.F.A:A Lecture in Feb.1934,R.I.B.A.Journal,479,1943 ＊7：Voysey,C.F.A:op.cit.,41,479,1943 ＊8：S.R.Jones and J.T.Smith,"The Welden House of Warwickshire and their Signficance",Transactions and Proceeding of the Birmingham and Warwickshire Archaeological Society 79,1960-61,pp.24-35　＊9：Voysey,C.F.A:"Voysey,C.F.A."The Quality of Fitness in Architecture,"The Cradtsman,23,November,182,1912

【参考文献】
・StuartDurant「C.F.A.Voysey」/St.Martin's Press/1992 年
・Wendy HitchMough[CFAVoysey」/PHAIDON/1995 年
・片木篤「アーツ・アンド・クラフツの建築」/SD 選書 /2005
・大橋竜太「イングランド住宅史」/ 中央公論美術出版
・John Brandon-Johns and others「C.F.A.Voysey architect and designer 1857-1941」Lund Humphries/1978/p.66
・ニコラス・ペヴスナー「モダンデザインの展開」/1949 年
・レイナーバンハム「第一機械時代の理論とデザイン」/ 鹿島出版会 /1976 年

【図版出典】
・図 1：イングランド住宅史 p.102
・図 2：イングランド住宅史 p.102
・図 3 ：Anthony Quiney/House and Home/BBC/ p.32
・図 4：StuartDurant「C.F.A.Voysey」/St.Martin's Press/1992/p.22
・図 5：イングランド住宅史 p.107(4-68)

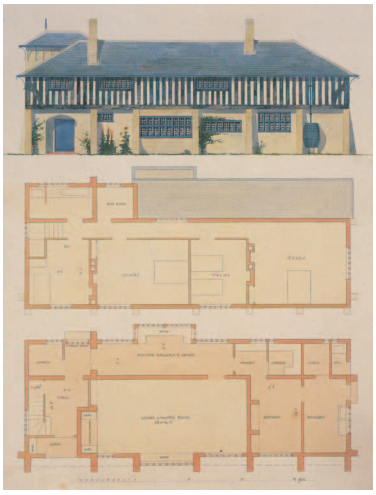


図 2：Cottgae/1885

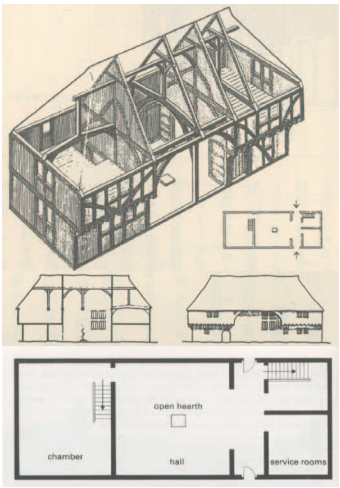


図 3(上)：ベイリーフ架構図、断面図、立面図
図 4(下)：ベイリーフ平面図 (奥行一部屋の一般的なウェーデルン・ハウスの形式)

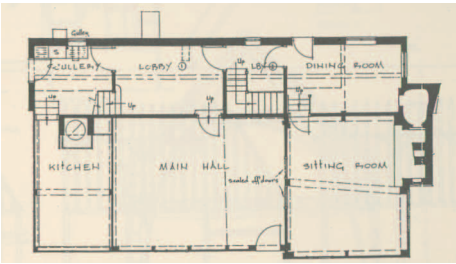


図 5：アルフリストンの牧師館 (1360 年頃): 奥行二部屋のウェーデルン・ハウス